



風　　く　　夜

水　野　仙　子

代々木の停車場から来た人らしい。二三年前に流行つた形の大さじ、川柳の芽のやうな房のついた黒い肩掛をかけて、髪を撫でつけた小肥り氣味の中お婆さんが、信玄袋を一つ下げて、裏は定めし藤色甲斐絹であらうと思はれるやうなこれも形の古い東コートの裾をつまむやうにして、解けかけた道を選ぶやうにして歩いて居た。其後から風呂敷包みを持つた若い女が女中ともつかず人の細君ともつかぬやうな身なりをして、何氣なく歩いて来るのを、先の人とはふと振りかへつて立ち止つた。

『あのもし、代々木山谷つていふのはどの邊でございませうね』

若い女は一寸立ち止つて、

(春陽堂發行)

眉山全集

總紙數 六千頁

上下各帙入 各實價二圓 送料十六錢

少袖、摺小木辨、百味嚢、

『山谷ですか、山谷はあのも少し先ですよ何番地にいらしやるんですか』

『へ有難うございます、百四十六だと思ひました』

『百四十六………ぢやアあの邊か知ら、お名前は？』

『岩田つて………』

『岩田さん………さうですね、お私も山谷へ行くんですからかういらつしやいました』

『有難うございます、これはとんだお厄介になります』

若い女は駒下駄なので、泥濘を抜くやうに大跨に歩くと、其後から一つ二つ泥が躓いて刎ねる。老人も前よりはいくらか足を早めた。

『先刻までは凍つて大へん歩きよかつたつけ、お極いこと！』

『ほんとにひどい道でございますねえ、私もこんな下駄を履いて來たものですから』

『どちらからいらつしやいました？』

『はい四谷からまゐつたんですよ、先に一度來たことがございますんですが、新宿からまゐつたものですから………道がわからなくなつてしまつて』

『さうですか、おはじめての方はねえ、新宿からいらした方がわかりようござんすよ、代々木からだと曲り曲りになつてますから』

『いゝ方にお目にかゝつて大へん助かりました、私は何處へも出つけませんものですから』
萬屋、八百屋、魚屋と、二三軒店家の並んだところを通り越して、各手に垣圍ひの中に隠れてるやう

な屋敷並びに來ると、若い女は一々瓦斯燈の番地を讀んで歩いた。

『岩田さんて必と此頃お越しになつたんでせう、あの新しい家ぢやなかつたか知ら』

『えゝつい先月越してまゐつたんですよ、えゝ新しい家でございました、大家さんは中村さんて………その直ぐ隣りの家でございました。』

ですから……道がわからなくなつてしまつて』

『さうですか、あはじめての方はねえ、新宿からいらした方がわかりようござんすよ、代々木からだと曲り曲りになつてますから』

『いゝ方にお目にかゝつて大へん助かりました、私は何處へも出つけませんものですから』
萬屋、八百屋、魚屋と、二三軒店家の並んだところを通り越して、各手に垣圍ひの中に隠れてるやう

な屋敷並びに來ると、若い女は一々瓦斯燈の番地を讀んで歩いた。

『岩田さんて必と此頃お越しになつたんでせう、あの新しい家ぢやなかつたか知ら』

『えゝつい先月越してまゐつたんですよ、えゝ新しい家でございました、大家さんは中村さんて……』

……その直ぐ隣りの家でございました。

家と家の間の畑の隅に、貸家の札が竹の先に刺されて突き出されてあるところもあれば、また一二箇所には必と同じやうな造りの家が建てられつゝある。何日かは何處からか誰れか其處に來て、新しい番地を瓦斯に書き入れるのだらう。

『百四十六——中村さんていへばあそこに見えるあの石の門がさうですけれどもね』

『あゝあゝまあ私は眞實にいゝお方にお目にかゝつてお蔭様でまゐりましたわ、此處でございまして……、ほんにまあね、有難うございました、此家でございすすよ』

岩田と表札の出た小さな格子戸造りの家の前を過ぎながら、

『それぢやア』

と若い女は軽く會釋して行つた。

『有難うございました、有難うございました』

と念入りの言葉が後に消えると、迂りのよさそうな格子戸の、鈴を振つて引き開けられた音が後を追ふ。

ちよいゝ赤い葉の手を出した要の生垣を曲ると、それあるが爲めに殊更低く見える笹野といふ家

の脇の原地に、子供達が三四人風をあけて居る。

『宗ちゃん寒いでせう』

と其うちの一人に聲をかけて若い女は二三軒先の冠木門を開けてはいった。

小供達は牧舎の原と言つて居る。家毎に生垣や板塀を控へて、今こそ屋敷は屋敷に續いて居るけれども、僅か三四年前までは草原と畑とに圍まれて、棚の中に牝牛がのどかさうに遊んで居た。年々と次々に空地が充たされて行つて、今はまだ牛舎の前の此地だけが草を残して居る。人は此原を横切つて道と道との間にまた幹に細い道を繋いだ。

この地續きを占て一軒藁葺の家があつた。此家だけは周圍が畑や野原だつた頃から見られた家で、要の生垣で挟んだ勝手口の枝折戸に、あしのと平假名で苗字が書いてあつた。どんな人が住んで居たか人は知らない。移轉の時にはお定りの蕎麥が勝手口に來るだけのことと、別段各々に其人を知らうともしないから、女中同志の話を旦那の勤め先を知つたり、人によつては出勤の行き歸りにたまさかあの人かと思ひ合ふ位のもので、誰しも隣同志が顔を見知らぬことは珍らしくない。葦野家の庭には色のいい楓があつて、木の葉が落ちる頃になると、眞紅な紅葉が古すんだ藁屋根を奥床しく見せた。時には琴の音などが洩れて居たが、向つて建てられた家の門があんまり大きかつたりして、かう一寸人によつては薄暗いやうな家を見すばらしく見たかも知れない。

其家がいつの間にか取拂はれた。露伴の小説を思ひ出すやうな、白い長い髻の綺麗なお祖父さんと、赤い帯の娘が、此處にも浮世の風が吹いて來たといつて、もつと／＼の山へ隠退いたといふやうな話

でもあるまいが、目ぼしい植木も堀られて何處にか運ばれて行つた。

原には餘計に風が來るやうになつた。要垣は其まゝになつて居るが、時々子供達がそれを分けて驅

は色のいい樹があつて、木の葉が落ちる頃になると、真紅な紅葉が古すんだ葉屋根を奥床しく見せた。時には琴の音などが洩れて居たが、向つて建てられた家の門があんまり大きかつたりして、かう一寸人によつては薄暗いやうな家を見すばらしく見たかも知れない。

其家がいつの間にか取拂はれた。露伴の小説を思ひ出すやうな、白い長い髯の奇麗なお祖父さんと、赤い帯の娘が、此處にも浮世の風が吹いて來たといつて、もつと／＼の山へ隠退いたといふやうな話

でもあるまいが、目ぼしい植木も堀られて何處にか運ばれて行つた。

原には餘計に風が来るやうになつた。要垣は其まゝになつて居るが、時々子供達がそれを分けて驅け抜けたりの何かするので、疎らになつて根元の土が堅くなつて居る。屋敷の跡を歩いて見ると、彼方此方堀つくらかへした跡の土が凸凹になつて、井戸跡の穴には竹を五六本周圍に挿して繩を張つてある。試に中を覗いて見ると、ぎら／＼した黒い水が底の方にいろ／＼な埃垢を浮べて居る。便所の跡らしい穴もあれば、厨と思はれるあたりに、陶器の破片や鐵葉の焼け殻などが散らかつて、ひよろ／＼した骨のやうな松の樹に、風の破れたのがひつからがつてひら／＼して居る。屋敷の隅には斜に向かせられた小さな木造りの祠が残されて、形ばかりの赤い鳥居が一つ壊れながらも曲みなりに立つて居る。祠の中には、雨風に打たれて幽に残つた粉白と群青色によつて、寶珠の玉を挟んだ狐の姿の見える繪馬が投り込まれてある。祠の屋根には鳥の糞が白く見える。

原といふのも名ばかりだけれども兎に角原である。草の青い頃には蝗や阜螽の一二疋は居てひよいひよいと飛んだ。人足が繁かつたり馬に喰はれたりして、道に面したあたりの草は擦り切れて居るが其處にはいつも空色のペンキの剣けた送乳車が投げ出したやうに置かれてある。猫ぢやらしの穂のつん／＼と出た枯草の束が轉ばしてあつたり、また肥料桶を並べた荷車などが横はつて居たりする。

ある日子供をたゞあんぶして、牛を見に來て居た巡査か何かの細君が、

『まああの肥料はよく賣れるんでせうね』
とボロやさん(肥料買ひ)が車を押して行く後を見送つていふと、

「いえ、奥さん、此節はもう誰アれも運びてがなくて困つて居るんでございますよ、こつちから頼むやうにして運んで貰ひますんですよ」

と牛舎の妹は、張り板をびた／＼叩いて切れの皺を熨しながら言つた。

(母は平家に捕へられ……)

突然牛舎の入口から、胸のきつくなつた、さうして汚れた袖無しの被布を着た六つばかりの女の子が大きな下駄を引ずつてばた／＼出て來たが、

『義郎ちゃん／＼あたい持つてあげようか』

と風に吹かれて剝げたやうな顔をして居る男の子の仲間にはいつて行つた。

殊更に早く廻る豆腐屋のラツバが聞え出した。實踐女學校の制服を着た女と、白い線のはいつた袴をはいた娘とが、前後して今日は少し例の時刻よりは早めに歸つて行つた。大島とやらいふ休職大尉の一人息子は、これももう歸つたと見えて、飛白のぶく／＼とした羽織を着て一人で威張り散らして居る。中學の一年生とかで You are bad boy とか All-right など、言つて子供達の大將になつて遊んで居る。

ふと其子は今、牛舎の窓のところから中を覗いて居る一人の男の姿を見付けた。すると早速聞くと、もなしに耳に挟んで居た噂を思ひ出して、

『やアい首……』曲りと言はうとしたが、いつかさう言つて母から、あれでも家の屋敷の地主だからと窘められたことを思ひ出して止めてしまつた。

男は首が曲つて居る。

『おかみさん居ないかい?』

と恰度その下に、古毛糸で何か編物をして居た子守り女に聞いて居るのだ。

ふと其子は今、牛舎の窓のところから中を覗いて居る一人の男の姿を見付けた。すると早速聞くと
もなしに耳に挟んで居た噂を思ひ出して、

『やアい首……』曲りと言はうとしたが、いつかさう言つて母から、あれでも家の屋敷の地主だからと窘められたことを思ひ出して止めてしまつた。

男は首が曲つて居る。

『あかみさん居ないかい？』

と恰度その下に、古毛糸で何か編物をして居た子守り女に聞いて居るのだ。

『え、あの一寸買物に……』

『居ない？』

と覗くやうに念を押して、

『歸つたら少し話があるからつてさう言つて、おくれよ』

と笑ひたさうなおどけた顔を見せて歸つて行つた。首の一寸曲つて居る人である。そんな特色のある

ばかりでなく、顔もやつぱり屋敷うちに住んで居る人とは違つて色の黒い、何處か百姓面をして居る。

銘仙の袖口の廣い筒袖の羽織などを着て居る時がある。

代々木に住んで居る人ならば、甲武線の電車の窓からでも、それによつて自分の家の方角を知ること

とが出来やうな、背の高い樺が一寸の森をなして居る。其森の中には二三軒中には藁葺の家などが

あつて、棕櫚だの椿だのが檐も小暗い程繁つて居る。門の前の樺の下には大津と瓦斯が出て居るが、

これが此邊の地主の家である。

そこらの道を曲り曲りに歩いて行くと、またも一箇所それと同じ名前の瓦斯を見出すことが出来る。

それが弟の家で即ち首の曲つた人が其家の主人なのだ。相當の地所も金も持つて居るとのこと

であるが、道から生垣を透して見たところ、古びた百姓家造りて、下駄の干さつてある園際に犬など

が蹲つて居たものだ。しかし庭はいつも箒目がついて居た。

地主といつても元は百姓だから、ちつとも尊大振つて居ない。赤い手を後に組んでぶら／＼歩いてる時などに、借地人や借家人の嚴めしい髯の顔に逢ふと、

『へえッ』

と腰を低くして挨拶をする。

弟の方はまだ四十になるかならない位であらう、若い奥様や娘達に行き逢ふと、いつでもぢろ／＼と見て過ぎる。

近所に住んで居る畑野といふ或る文學者の家の女中は、毎日癖のやうになつて子供を連れては牛舎へ行つて遊んで居る。女中は誰からともなく種々なことを聞いて來た。牛舎の旦那が居ないと、大津の弟の方の旦那が、うそ／＼家の中を覗き込んで居たのも見たことがあるし、牛舎の財政が困難で、少くない金を大津から融通して貰つたことがあるのも小耳に挾んで來た。

豆腐屋が一人からまた一人とラツバを吹いて來る。牛舎のおかみさんは急ぎ足に買物から歸つて來た。

『あつち母ちやんが歸つたよつ』

目敏く見付けて女の子は家の中に後を逐つてはいつた。

『お母ちやん／＼』

と後をつけ廻すのを、

『あつち母ちゃんか歸つたよ』

目敏く見付けて女の子は家の中に後を逐つてはいつた。

『お母ちゃん〜』

と後をつけ廻すのを、

『頼いね、まア待つてあいでよ』

と叱り付けて、

『なア添田さん、静岡へ手紙一本書いてあくんさいよ、一寸來て貰はなくちやア私一人でやり切れないもの』

男部屋の薄暗いところに寝ころんで居た若い衆は、もど〜と起き出して茶の間へはいつて來て胡座をかいた。仕事着の上に綿入を帶を締めずに引つけて居る。

『そして東舎の方はどうするんです』

ぼろ〜と頭を掻いて煙管をぬく。

『それだつて來て貰つてからの話だわね、面倒臭いからと思つて私がどうにか計らうと、やれどうのかうのと後で小言をいはれるんだもの……今日はもう廿七日だ、廿七日だね懺か……』

『はあ』

添田は至つて無愛想な男だ。此頃は殊にさうだが誰れも別段氣に留めない、却て氣嫌をとるやうにと〜仕向けて居る。此男に今拔けられようものなら、早速營業の方が支へてしまふからで、

あかみさんは胸をはだけて赤んぼを膝に抱きあげた。丸髻が今日はつや〜として居る。反齒の氣味ではあるが、色は白い方だから見られないこともない、併し決して美人ぢやない。二十七八であらう。

『さよ、小刀を持つてあいで』

と子守りに言ひ付けて、あかみさんは片手で風呂敷を解いて食パンを出した。

『さア安つちやん』

と其端の方を切つてやると、女の子は戸棚から砂糖の袋を出して来て、炬燵の上に運んでむしやくとやり出した。

『旦那が来たらちやア己れア静岡の方へ行かうかなア』

おかみさんは黙つて居た。静岡とは旦那の郷里で、其處にも四五十頭を入れた牛舎がある。東京に來てもから躍起とならざるを得ないやうな家の中の空氣が厭なものと、静岡の方のが有望なので大抵田舎にばかり行つて居る。東京の方のは妹に添田を嫁はして二人に委せ、自分は家内を連れて静岡へ行きたい考へなのだが、添田がどうもうんと言ひさうもないので困つて居る。若い者で家の内情も知つて居るから、おかみさんが行つてしまつたら、さしづめ借金責めが自分にかゝつて來ることだらうとあまり望ましくも思つて居ないのだ。

年暮に張り替へたのだけれども、子供の手の届くところの障子は皆破れて、縁側の隅に押しこめた襦袢綿が見えたり、裾の方の形が爛れた子供の着物までがあららに投り出されてある。うつすらとそこらに暗が迫つて來た。

『あゝ、齋藤、やう』

と若い衆はぐつすり寝込んで居る運般方を起して仕事にかゝつた。

脚をかついだ點燈夫が駆け廻つて來た。牛舎の簷にも牛乳搾取業三保舎牧場として瓦斯が點いた。間の抜けたやうな顔をした蕎麥屋の出前持らが、縁の赤い膳を肩にして先刻からそこをうろく

『あゝ、齋藤、あゝ』
と若い衆はぐつぐつと寝込んで居る運般方を起して仕事にかゝつた。
脚をかついだ點燈夫が駆け廻つて來た。牛舎の簷にも牛乳搾取業三保舍牧場として瓦斯が點いた。
間の抜けたやうな顔をした蕎麥屋の出前持ちが、縁の赤い膳を肩にして先刻からそこらをうろく

して居たが、

『もし此邊に管さんて家はありませんか』

と子供らのところへ寄つて來た。

『ないやそんなとこ』

と一人がいふ。

『古河さんだらう』

『いえ古河さんも聞いて見たんだけど、さうぢやないんで』

『管なんてとこあないや』

『代々木ぢやないんでないの』

と寄つて來た子守がいふ。

『いえ代々木です、酒屋の横丁を曲ると直ぐだつて……』

『ぢやア古河さんだよ必と』

出前持ちの男は困つたやうな顔して暫くつゝ立つて居たが、また歩き出して一々門札を見歩いて行つた。

牛舎の家の前にある唧筒井戸が軌り出した。湯を沸かす釜に汲み入れるので、柄の下に醬油樽などを
持つて來て、背の小さい人はそれを足場にしたりギコリ／＼ボタンギコリ／＼ボタンとそれがうるさ
いやうな邊りに響く。少し風が出て來たやうだ。

女中が一人の子供を迎へに來ると、あとの皆思ひ出したやうに歸つて行く。大きな白い洋犬が、何處からともなく來て原を横切つて行くと、近い地主の櫓の森に、幽に風の鳴る音がして、牛舎の戸口から赤い火がちら／＼と見え出した。

一先づ掃き出した茶の間に、白い瓦斯の光りが充ちて居る。おかみさんは赤んぼを寝かすとして、炬燵に手枕をして後向きになつた。外出のまゝのを着替へずに羽織だけとつて、帯はぎゆつと結びつばなしのが背中に皺になつて居る。

『畜生！ 待つとれ！ どうどう』

添田は仕切りの棒にのしかゝつて催促する牡牛を肩で制して、大杓柄で酌み配ける食料の桶を一々運んでやる。積み重ねた桶やバケツや俵などの影を、煙りの流れる手ランプが覺束なく照らして、水が溢れてぐちや／＼づる／＼した床板に、下駄の音がばたり／＼と響く。

『どれはじめようかな』

添田は赤黒く汚れきつた白の前掛けをしめて、バケツにお湯をとつて牛の後に廻つた。

『おうい齋藤、ボロ搔いてくれんか』

『おう、待つとれ今……』

舊の隙からはいる風で、手洋燈の煙りがふう／＼と流れる。かさ／＼こつ／＼と藁を踏む音で一頻り静かになつた。

『どう！』

静かになつた。
『どう！』

添田は乳首を拭き取つてぐいと腰掛けを牛の腹近くに寄せた。跨の間にバケツを挟んで體を決めると兩の手を乳首にかけてぐいぐいと代りばんこに揉んでは引く。迸つてバケツを打つ音が見る／＼白い泡沫をつくつて行く。

『今日何て怪我人が出来たとよ、藤倉で』

『ほう、どうしたんだ』

『齒車に捲き込まれたんだつてよ』

『豪いことやつたなア、カーボンか、藤倉の方か』

『藤倉だつてよ』

『死んだのか』

『うゝん死なねえ』

『……なんだなア、藤倉にや女工が随分居るなア、どの位居るもんだ？』

『知らねえや、なんだね女工寄宿舎なんてものがあるんだね、新町の通りに行くときよく下駄なんか買つてやがる』

安子が俄にわつと泣き出して、續いておかみさんのそれを叱る聲がささえる。と間もなく止むと、

『これが……』

と運搬方は首を左の肩につけてみせて、

『先刻聲がしたやうだつけ、おかみさん留守だつた』

と目元で笑つて居る。

添田は黙つて居たが、此時旦那の顔とおかみさんのこと、持ち出された縁談や牛のことやをこつちやませに思つた。

『おかみさんなア』

と今度は聲をひそめて、

『昨日お富さんからコレを借りたのを知つてるか』
と指で丸をこしらつて見せる。

『眞實か』

と添田も耳をたてた。

『眞實さ、昨日の夕方……お富さんよく持つてゐるなア、女中の給料つていゝものかなアなんだぜ己ア先月分をまだなんだ』

搾つたあとの乳に小牛をつけて、添田は次々と搾つて行く。公然許しを得たわけでもないが、幾箇月も滞つた給料の抵當に、いざといへばこの牛を曳いて行かうと、常々大切に置いて置く牛の前に来て添田はまた此頃澁皮のむけて来た畑野さんの女中と旦那の妹のお徳さんと、この牛のことを一緒にしていろくと思つて見た。

戸を閉めて見れば風の強くなつて居るのが知れる。土曜日の晩毎に聞こえる會社の重役か何かの邸に、子供の聲や書生の聲の交つた讚美歌が起つて、オルガンの音がそれに従いて行く。

田はまた此頃油皮のむけて来た畑野さんの女中と旦那の妹のお徳さんと、この牛のことを一緒にしている／＼と思つて見た。

戸を閉めて見れば風の強くなつて居るのが知れる。土曜日の晩毎に聞こえる會社の重役か何かの邸に、子供の聲や書生の聲の交つた讚美歌が起つて、オルガンの音がそれに従いて行く。

寒いけれども仕方がない。例の時刻になると、運般方は乳の罐を車に積んで、印入れの提灯をつけて車を引き出した。四谷神樂坂あたりの特約店に運んで、歸る時には大抵曉近くになるのだ。

宵からこくり／＼居眠りして居た子守女の小夜は、悪い癖で人が寝仕度にかゝる頃になると目が冴えて来る。自分の仕事がある時には八ヶ間敷いふが、さもないければ馬鹿話に笑ひこけて、子供の添乳のまゝになつてしまふことも珍らしくはないから、そんな時にはてんでに勝手なことをして寝たければ直ぐにも寢床に潜り込んでしまふ。今夜もおかみさんは初めから欠伸ばかりして居たが、目尻の涙を拭き／＼つひ眞つ先に床の中にはいつてしまつた。

おかみさんは炬燵を控へた、便所に最も近い八疊に寝ることになつて居る。上り口とも茶の間ともいふやうな、神棚のある四疊にはお徳と小夜が床を敷いて、障戸一ツ次の六疊が男部屋となつて居る。外に物置代りにして置く三疊とたゞこれだけの家で、障戸はいつでも破れて居るのだ。

一頻りづ／＼櫺にござと風が鳴る。何處かで犬の吠えるのが止むと、あとはたゞ風の音ばかりがさらさらと過ぎて行く。冷たい足を縮めて小夜はただ一人目覺めて居た。

コッ／＼／

ぎよつとして小夜は固くなつて耳を欹てた。櫺の風がござ／＼となだれる。

コッ／＼／

……何やら體に人聲が交つた。

電氣でもかけられたやうにびりつと冷たいものが體中に流れて、動悸が打つ、息もつかない。

……足音は——足音だ體に——足音は偷むやうに土を踏んで暫しの間を置く。

コツ／＼／＼

音は便所の前の雨戸にあたつて消える。

……はつと思ふ間もなく、ぱつと隔ての障戸に燧寸の火がさしてまたぱつと消えた——。

風　　く　　夜　　終